



夫は10月16日(火)から、2回目の抗がん剤投与のサイクルに入ることが出来ました。初回の投与から44日目でした。2倍も時間がかかってしまいましたが、感染症も治癒し、リンパ腫増殖抑制の放射線治療も無事に済み、体力も少しずつ増してきました。副作用が激しかったので、2回目は抗がん剤の量を少なめにしています。22日(月)の点滴を終えると、副作用の結果次第で、一時退院となる予定、と知らされ、本当に嬉しくなりました。感謝の思いで一杯です。病名を告知されてから2か月が過ぎました。

私は定期券を購入し、ほぼ毎日見舞いに通いましたが、定期券の期限の19日(金)に、お駄賃ということで、初めて途中下車致しました。目指すはパナソニック汐留ミュージアムで開催中の「ジョルジュ・ルオー(1871-1958)展」です。副題は「聖なる芸術とモデルニテ(現代性)」ですが、その両方を込めて「愛のすべて。」と銘打っていました。



教会の牧師館に住んでいた頃、雑誌から切り抜いた、ルオーの小さな絵(左)を飾っていました。左右の人々の顔に見られる憎悪、軽蔑、不安、悲しみを受容しつつ、違う世界を示す顔のようで、このキリストの顔を見るとほっこりと慰められるような気持ちになったものです。インマヌエル、復活のキリストとして見る事が出来ました。けれども、庶民、社会の底辺に住む人々を描いたルオーの絵には悲哀が深く感じられ、あまり好みではありませんでした。

今回の展示で、ルオーについて教えられることが多かったのです。ルオーはもともと「ネクラ」な人間で、絵がどうしても暗くなって、悲惨、苦悩の姿になる。自信を失っているルオーに友人が、それを描き進めていって、その命の奥にある愛がかたちになるまで描きなさいと勧めたといいます。ルオーは同じ主題を繰り返し描き、また、描いた上に描き足すということに熱中し、人間の苦悩と共に神の慈愛、赦しを表現する彼の境地を獲得したのでしょう。

展示「ミセレーレ」では、ほぼモノクロの世界でしたが、ここで、ルオーはトリノの聖骸布と、ベロニカの伝説に非常にインパクトを受けて、キリストの顔を描いたと知りました。20世紀の人間であるルオーですが、靈感に示されたことがあったのでしょうか。また、父から職人気質を受け継ぎ、ステンドグラス職人の元で徒弟奉公したため、光と色の完成度にこだわりがあったことでしょう。黒い大胆な縁取りを見ると棟方志功の作品に似た力強さと胆力を感じます。塗り重ねた絵具に、立体感があります。海外にある作品を間近に見られて幸せでした。

展示「ミセレーレ」では、ほぼモノクロの世界でしたが、ここで、ルオーはトリノの聖骸布と、ベロニカの伝説に非常にインパクトを受けて、キリストの顔を描いたと知りました。20世紀の人間であるルオーですが、靈感に示されたことがあったのでしょうか。また、父から職人気質を受け継ぎ、ステンドグラス職人の元で徒弟奉公したため、光と色の完成度にこだわりがあったことでしょう。黒い大胆な縁取りを見ると棟方志功の作品に似た力強さと胆力を感じます。塗り重ねた絵具に、立体感があります。海外にある作品を間近に見られて幸せでした。

夫もルオーが好きです。夫のために図録を買い求めました。夫は日暮れの町に人々と共に佇む主イエスの絵を見たかったと言います。元気になって、一緒に展覧会に出かけましょう。

				
聖顔 ヴァチカン美術館蔵	ベロニカ ボンビドー美術館蔵	サラ ルオー財団蔵	エッケホモ ボンビドー美術館蔵	秋またはナザレット ヴァチカン美術館蔵